

2016年度 活動成果報告書

特定非営利活動法人 碧いびわ湖



新しいリサイクルせっけんのブランド名はBIWACCA（ビワッカ）
びわ湖でつながる、循環する暮らしがコンセプトです

子どもと湖が笑ってる未来へ

碧いびわ湖

おかげさまで碧いびわ湖は、2016年度も様々な事業を展開することができました。ご協力をいただいたみなさまへの心からの感謝を込め、本報告書を発行いたします。2017年度は、びわ湖のせっけん運動から40周年。一人一人の想いと行動を有機的につなぎあって、地に足のついた力強い歩みを進めていきたいと思えます。ますますの温かいご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。 2017年5月 代表理事 村上 悟

TOPIC 1 せっけん運動の世代継承

びわ湖の赤潮とせっけん運動から40年

志を引き継ぎ、スタイル新たに、二世代のせっけん運動が始まりました



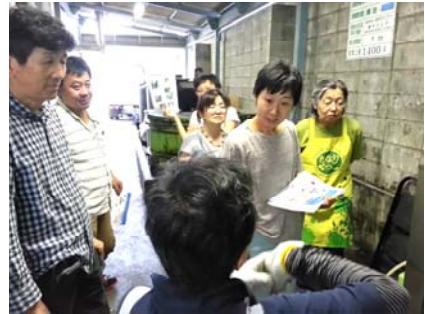
8月のマザーレイクフォーラム「びわコミ会議」に、ぐるぐるびわ湖プロジェクトで合同出展をしました



4月にBIWACCA、5月にぐるぐるびわ湖プロジェクトで瀬田の株式会社マルダイ石鯨本舗を見学しました

BIWACCA (ビワッカ)

NPO法人愛のまちエコ倶楽部と共同して、リサイクルせっけんの開発を進めました。ミーティングを重ねて「BIWACCA」というブランド名称を決定し、ロゴデザインができました。実験と試作、先進地見学などを経て品質の向上を進めました。秋には 500 個のサンプルを作り、モニターアンケートを実施しました。



川崎市民せっけんプラント見学 (BIWACCA)

ぐるぐるびわ湖プロジェクト

「せっけんを入りに循環型の暮らしを広める」を合言葉に、志を共にする団体（安全農産供給センター&使い捨て時代を考える会、関西よつ葉連絡会、地域女性会連合会、生活クラブ生協等）と連携し、「ぐるぐるびわ湖プロジェクト」の活動を本格開始しました。5月に「せっけんカフェ」、8月にマザーレイクフォーラム「びわコミ会議」での出展、11月に「せっけんマイスター養成講座」を実施し、団体間の連携の深化を進めました。



サンプル製造 (BIWACCA)

若者とお母さんの仕事づくりに

せっけんづくりを通じた新たな仕事づくりとして、使用済み食用油の回収作業を就労に課題を抱える若者に、液体せっけんの充填作業を子育て中のお母さんに、それぞれ担っていただくことを開始しました。



びっくりちゃっかり 140万人県民集会での「せっけんカフェ」

<共同購入事業実績>

| | | | | |
|-------------|---------------|---------|-------------|-----------|
| ●リサイクルで資源活用 | リサイクル粉せっけん供給 | 3,942kg | ←原料用廃食用油回収 | 9,258L |
| | リサイクルトレバ供給 | 10,815袋 | | |
| | リサイクルティッシュ供給 | 4,680袋 | ←原料用牛乳パック回収 | 332,408kg |
| ●地産地消で農村活性化 | 地域産無農薬・減農薬米供給 | 4,265kg | | |
| | 地域産菜種油供給 | 276kg | | |
| ●地域材活用で森林保全 | 地域産間伐材利用紙供給 | 47ケース | | |

TOPIC 2 住まいづくりの広がり

雨水・お日さま・森の木々 身近な自然とつながる住まいづくりが
さらに広がりはじめています



リフォーム事例のオープンハウス（秋久保さん宅）



みんなで雨水タンク設置（森の遊び場 in 日野）



福祉施設での太陽熱利用機器設置（小規模多機能型居宅
介護 秋桜舎／株式会社なんてん協働サービス／湖南市）

リフォーム事例でのオープンハウス

中古住宅を購入してエコリフォームされた秋久保さん宅でオープンハウスを2回開催しました。自宅や実家のリフォームを検討されている方々に、雨水利用、太陽熱利用、薪ストーブ、木製サッシ、自然素材でのリフォームの心地よさや、住まいづくりの考え方・進め方を感じていただくことができました。

PRツールを制作

滋賀県地域エネルギー活動支援事業補助金を活用し、身近な自然とつながる住まいでの暮らしを紹介したショートムービー「雨と暮らす」「火と暮らす」と、オープンハウスのチラシを制作しました。

福祉施設での太陽熱利用機器設置

小規模多機能型居宅介護やグループホームなどの福祉施設での太陽熱利用機器の設置を実施しました。東近江市で1件、湖南市で2件実施しました。滋賀県の地域エネルギー関連補助金も活用しています。

研究機関との連携

滋賀県立大学の和田有朗研究室の卒論生が取り組まれた、雨水利用の設置者への意識調査に協力しました。社会的価値のある行動（雨水利用の実践）を広める際の行政施策の課題点について、私たちNPOの活動が一定の役割を果たしていることが明らかになりました。

<住まいづくり事業実績>

| | | | |
|-------------------|----|-----------------------|-----|
| ●小型雨水タンク（～300L）設置 | 3件 | ●大型雨水利用システム（1t～）設置 | 7件 |
| ●太陽熱利用給湯機器設置 | 6件 | ●木質燃料機器設置（薪・ペレットストーブ） | 2件 |
| ●木製サッシ工事 | 2件 | ●その他リフォーム等工事 | 16件 |



秋久保さん宅の雨水タンク（洗濯と散水用）



秋久保さん宅の太陽熱温水器と煙突



住まいと暮らしの紹介ショートムービー

TOPIC 3 地域づくりと暮らしづくり

ひとりひとりの思いと力を寄せあって
つながり豊かな地域づくりと暮らしづくりをすすめました



栗東・たまたまばやしでは、子どもと大人みんなで「石がま」をつくりました



あまいろ発！市民メディアチャレンジで「びっくりちゃっかり140万人県民集会」を開催しました



違いを踏まえつつ、思いを共にするための「コミュニティ・オーガナイズing」を学びました

高校生によるホタルの自生する川づくり

株式会社みらいもりやま21、NPOびわこ豊穡の郷、守山市などとの連携により、「あまがいけプラザ」近くの都市河川で、県立守山高校の生徒によるホタルの自生する川づくりの支援に取り組みました。「小さな自然再生」の手法を学んだ生徒たちが、生き物の立場になって、川づくりの進め方を考えました。



高校生が考えるホタルの自生する川づくり

野外子育て広場を開催

こども未来基金の助成を受け、たまたばやし（栗東）、目田川モデル河川（守山）、兄弟社村（近江八幡市）で「野外子育て広場」を開催しました。子どもたちが自然の中でのびのびと遊び、お母さんが交流できる場を設けました。



目田川（守山市）での野外子育て広場

あまいろ探偵団・市民メディアチャレンジ

「あまいろ探偵団」の活動の中から生まれた「あまいろろ発！市民メディアチャレンジ」では、「あまいろチャンネル」を通じて、市民ひとりひとりの声を集めて発信したほか「びっくりちゃっかり140万人県民集会」を開催し、多様な人々が集って平和や環境や教育などについて語り合う場をつくりました。

くらしのね

滋賀県地域エネルギー補助金を活用して、一人一人のお母さんの暮らしと住まいを紹介する「くらしのね」の創刊準備号を発刊しました。



「くらしのね」創刊準備号

<会員活動実績>

| | | | |
|-------|------|-------|-----|
| ●運営会員 | 121人 | ●賛助会員 | 31人 |
| ●一般寄付 | 17人 | | |

“草の根自治の運動”を引き継ぐ

——環境生協から碧いびわ湖へ移行してからの8年を振り返って 根木山恒平（常務理事）

●1 「せっけん運動」を引き継ぐものとして

この7月末で、碧いびわ湖が環境生協の事業を継承して丸8年になります。碧いびわ湖は、1977年にはじまり、その後全県に広がり、「草の根自治」の滋賀を象徴する住民運動の代表とも言える「琵琶湖のせっけん運動」を受け継ぐ市民組織（NPO）です。

ちなみに、碧いびわ湖の代表をしている村上悟と、私は、二人ともに1976年生まれですから、当時はまだ赤ん坊でした。そんな頃に、この運動は「碧いびわ湖を子どもの未来へ」という合言葉で、県内各地に広がりました。ちょうど環境生協の理事長であった藤井絢子さんが私の父と同年生まれであること、藤井さんの三女が私たちと同年であることが象徴するように、まさに私たちの母親・父親たちの世代のみなさんが、1977年当時、子育てをしながらはじめたのが「せっけん運動」だったと言えます。

先日、たまたま滋賀県立大学環境科学部の2004年の年報に掲載された近藤隆二郎さんの『琵琶湖水環境保全の住民運動論—シナリオと社会実験のススメ—』という論者を読みました。そこに以下のような記述がありました。

“琵琶湖をめぐる住民運動において、著名なものは石けん運動ある。（中略）特筆すべきは、琵琶湖を中心としたこのような環境、水環境保全への運動の盛り上がりが、“ごくふつうの”住民や地域団体からも沸き上がったということにあるという。往時の環境運動は、先鋭的な思想家らが地域外部から持ち込むことが多いのだが、滋賀の場合はむしろふつうの“ムラ”であった組織からも沸き上がったとされている。”

そう、私たちのこの8年間の取り組みは、こうした特徴をもつ「草の根自治の運動」を、私たちの母・

父の世代からバトンを受け取り、それをわが子たちの世代へ引き継ぐ試みの第一歩でした。その経過をすこしだけ振り返ってみたいと思います。

★2 子育て世代の間づくり

私たちが一番はじめに取りかかったのは、同世代の間づくりでした。2008年当時、環境生協の組合員の多くは、私の親世代ぐらいの方方で、子育て世代の組合員はほんのわずかでした。

そうした中、最初に出会いに行ったのが、当時組合員の中で最も若い世代であった中野和子さんと富岡尚子さんでした。その他に非組合員からも何人か、つながりのある知人・友人のところに、「琵琶湖のせっけん運動を引き継ぐ市民の組織をつくるから協力してもらえないだろうか」という相談をしに行ったのを覚えています。その中には「環境生協」や「せっけん運動」という言葉を知らない人もありました。

村上さんが、主に彼の長年の環境活動でつながる知人を訪ねていたのに対し、私は主に子育て世代の方々に会いに行っていたのを覚えています。なぜに、環境活動でつながる方々だけでなく、一見、別ジャンルとも言える子育て世代の方々にアプローチしたのでしょうか??

もしかしたら、ちょうどわが子の出産を年内に控えていたという個人的な事情もあったからかもしれません（笑）。実際、お出会いする人たちのお話からたくさんのことを学びました。また正直なところ、琵琶湖の環境の危機を訴えるだけでは、周りにいる同世代の人びとの多くの共感をうるのは、とても困難だと感じていたのかもしれない。

当時は、通常業務に加えて、新しいNPOの設立、事業継承などの煩雑な事務作業を、村上さんととも

に夜な夜な安土の事務所でこなすのが日常風景となっていました。作業だけでなく新しいNPOのあり方についても延々と話し合いを繰り返しました。

私たちは、せっけん運動は「琵琶湖を守ろう」という環境運動であると同時に、「子どもたちの未来を真剣に考え、行動した」子育て中の親たちの運動でもある、という共通認識をもつに至りました。碧いびわ湖のスタートにあたり、新しい合言葉を「子どもと湖が笑ってる未来へ」に決め、ベテラン組合員であった浅野博子さん、杉尾尚子さん、菱田みよ子さんらとともに、新たに理事になってもらった中野さん、富岡さんをメンバーに迎え、運動の担い手の世代交代を目指し、新しい会員活動「びわこ未来プロジェクト」をスタートさせました。

▼3 『あまいろだより』をとおしてつむぐ

会員活動のひとつとして情報紙『あまいろだより』の発行がはじまりました。3か月に一度、会員の手によって企画・編集・発行するものです。この紙面づくりの中で、まず取り組んだのが、各地の子育て中のおかあちゃんたちに原稿執筆を依頼し、寄稿いただくことでした。当時県内には、おっぱいっこクラブとか、おっぱい塾と呼ばれる保育サークルや、こめっことか、粒っ子といった米飯給食を目指すおかあちゃんグループが、各地に点在していました。編集メンバーの中野さんの人脈をたよって、各地のサークルのみなさんにコンタクトし、子育てに関する記事を書いてもらい、なんとかして子育て中の親たちとの接点をつくっていきたくて苦心していました。

その後、『あまいろだより』は、2012年6月号から、綾牧生さん、北岡七夏さんという新たな編集メンバーを迎えることに成功します。が、実は、そこに至るには数年の時間を要しました。2009年頃に、(いまも理事をしてきている)喜多亮夫さんのおつれあいの千紗子さんを含めたお三方に、お話しをうかがいに行ったことがありました。当時、彼女た

ちは、草津おっぱいっこクラブや、自主保育サークル・くじらハラッパ、また信楽でのどんぐり団などをされていて、ときたま、パスカルズというビッグバンドのめっちゃにぎやかで楽しいコンサートを開いたり、環境活動家の田中優さんを招いての講演会を主催したり、鎌仲監督の映画上映会を開いたり、ふだんは、とってもゆるくて、自由な雰囲気の中できままに子育てする場を自ら生み出しながら、かつ、抜き差しならない社会問題にドドンと正面きって向き合う独特なスタイル、ノリ、価値観がありました。私にとって、そのあり様は、つかみどころがなく、よくわからないけれど、なんとなく、そこには、碧いびわ湖が引き継ごうとする「草の根自治の運動」に通じるなにかがあるような気がしていたのでした。

◆4 「3.11」を経て起きた創発するムーブメント

そうした中で、2011年3月11日を迎えます。それを機に私たちの周辺の人びとの動きはとっても目まぐるしくなりました。わずか数か月のうちに、ものすごい数の人が波状的につながり、大きなムーブメントとして「アースデイしが」が実現しました。私も、村上さんや中野さんとともに、その渦中で一緒にさせてもらいました(『あまいろだより号外』として、中野さん、北岡さんに、玉崎洋子さん、南村たずえさんを加えた4人による原発事故後の緊急座談会記事を発行したのを覚えています)。その動きの中心にいたのが、玉崎さんや北岡さん、綾さん、またその中間のユニークなかあちゃんたちでした。

社会学に「創発」という言葉がありますが、ご存じでしょうか？創発とは、アリの群れをたとえによく説明されます。アリは群れの中には、全体を指揮・監督するアリがいるわけではなく、1匹1匹のアリ(個体)同士が相互に連絡・作用しあうことで、一見、各自が勝手に動いているように見えて、その実、全体としてきわめて合理的な仕事をやってのけるらしいのです。3.11後のアースデイしがを生み出した

あの光景は、まさに創発していると私は感じました。現実、とても悲しいことが起きてしまい、この先、どうになってしまうのか、という不安に包まれつつ、現に目の前で創発していく人びとのムーブメントに「草の根自治の運動」のあり様を垣間見た心持ちがしました。

■5 かあちゃんたちから学ぶ「草の根自治」

その後、現在に至るまで、私たちは、子育て中のかあちゃんずという人の群れがなす振る舞いの中から、なにかしかを学びとり、碧いびわ湖の活動として形づくる試行錯誤を繰り返してきました。例えば、栗東の里山にて「たまたばやし」という活動がはじまったのが2012年1月で、(北岡さんと綾さんのお仲間の)勝瀬麻央さんを中心に、森のようちえんに子どもを通わせていたり、栗東おっぱいっこクラブに関わるおかあさん方にもたくさん力をいただきました。

『あまいろだより』も、2012年6月号からリニューアルし、さらに、その2年後の2014年6月号からは、さらに編集体制を一新し、「編集委員会」による独立編集体制となり、位置づけもいわゆる「情報紙」から、「手づくり市民メディア」と表すようになりました。それ以来、『あまいろだより』では、毎回、特集テーマが設定され、ゲストも含めた複数のメンバーによる座談会記事を、丁寧に毎回、文字起こしから構成、編集まで、編集委員のみなさんの共同作業により続けてくださっています。自分たち、ひとりひとりが望む暮らしや社会をひとりひとりが語り、また、それをクロストークさせることで、共同作業として草の根自治のエッセンスをつむぎだす作業を、碧いびわ湖の新しい旗印として担ってくださったのが、中野さん、綾さん、北岡さん、そして、きむきがんさん、岸田知之さん、藤井朋子さんの6人でした。(最近になって、さらにお二人のメンバーが加わってくださっています)

また、自主保育サークルの場づくりを模倣し、運営にもご協力いただきながら2013年に守山の目田川河川公園ではじまったのが「野外子育て広場」の活動です。「身近な自然とつながる暮らし」という碧いびわ湖の住まいづくり事業のコンセプトとも通ずる価値観を体現する場として、また、地域の里山・里中川など身近な自然環境の保全活動を行う他のNPOや地域との連携/協働をさぐる場としても位置付け、守山、栗東、近江八幡と会場を広げながら4年間にわたって実施してきました(2017年3月をもって一旦休止)。また、野外子育て広場の活動をきっかけに、県内の野外保育や自主保育などの活動で通じ合ういろいろな子育てサークルとのネットワークも広がりました。その際には、森のようちえんの西澤彩木さんや、近江兄弟社小学校のとりいしん平さんなど、教育の専門家にもご協力いただくことで、個性派ぞろいの人びとが繋がっていくことができました。

▲6 チャレンジ、学び、そして実践はつづく

そろそろ紙面が足りなくなってきたので、これまでの歩みを十分には追い切れていませんが、まとめに入ります。これまで、ざっくりご紹介してきたように、私たちは、ゆるやかにつながる子育て中のかあちゃんずの振る舞いの中から、草の根自治の運動をいま、紡ぎなおす試みを続けています。

そのひとつの集大成が、昨年取り組んだ「あまいろ発!市民メディアチャレンジプロジェクト」でした。あまいろだよりや、野外子育て広場、その他、碧いびわ湖の活動に限らず、ゆるやかにつながるさまざまな活動との連携により「びっくりちゃっかり140万人しが県民集会」というものを実施しました。野外劇あり、マルシェあり、せっけんのPRブースあり、くらしとせいじのトークあり、経済学カフェという学びの場があり、台所付属大学と言ったフリーズも生まれました。自分たちが望む暮らしや社

会は、自分たちで語り、行動し、つくる！そういった規範を共有するすくなくない仲間が協力しあって、行動することができました。また、活動するために必要なボランティアな労力だけでなく、資金も、およそ120万円の予算を立て、自分たちで資金を調達することにチャレンジし、見事に達成することができました。

かつて、藤井さんや細谷卓爾さんをはじめとした先輩たちは、さまざまな専門をもつ複数の生協/協同組合が、自ら社会をつくる原動力になるんだ、と考え、現に、環境生協やしみんふくし（生協）をつくり、実践されてきました。その時に言われていたのが、「自らお金を出し、事業を運営し、利用する」（出資、利用、運営）ということでした。昨年の私たちの新たなチャレンジでは、規模は小さいながらも、その規範を体現できたように感じています。

昨年のチャレンジでは、うまくいったことがたくさんありました。と同時に、反省しないとならないこともたくさんありました。そうした教訓をもとに、いま、私たちは、ひとりひとりが自由に、自分が望む暮らしや社会を感じ、表現しながらも、個人がバラバラに孤立化し、社会的な変化を生み出す力を失ってしまっている状況から、互いの違いを踏まえながらも、みんなで力をあわせて、おおきなうねりを生み出すための方法や心得についても学びはじめています。（「コミュニティ・オーガナイズング」や、「NVC/非暴力コミュニケーション」など）

最後に、この8年間の取り組みを振り返ったときに、すこし明確になった感覚があります。なぜ、私たちは、当初、環境活動にかかわる人だけでなく、子育て中の人びとが仲間になってくれると感じたのでしょうか？つかみどころのない、ゆるやかなあちゃんずの人の群れに、言葉になりづらい魅力を感じとったのは、なぜでしょうか？

先に紹介した近藤先生の論考では、（村上悟さんの師匠でもある）末石富太郎さんが提起された「目的

合理性と形態合理性」に触れて、あらためて「持続可能性の視点からは、この形態合理性が重要である」と明確に言及してくださっています。

まだまだ不勉強で、うまく自分の言葉になりきらないもどかしさが残りますが、これまでに、滋賀県立大学で、末石先生や近藤先生、また学生であった村上さんが著してきた論考にも目を向けつつ、今年、県大に着任された瀧健太郎さん、また、平山奈央子さんや上田洋平さんと言った県大の頼れる仲間たちとともに新たな学びを得たいと思います。また、学びという面では、最近、「てらすくらす」という新たなプログラムを共にスタートさせた滋賀大学の中野桂さんや、地域で事業経営をされている松本茂夫さん、有本忍さんたちとの取り組みにもワクワクしています。

この8年間の碧いびわ湖の歩みについて、周りで見守ってくださっているみなさまには、どのように見えているでしょうか？きっとたくさんのご心配をおかけしていることと思います m(_ _)m。

振り返ると、この間の歩みは、目的合理主義というよりは、形態合理主義的な歩みであり、おそらく、周囲からはつかみどころがなく、なんだかとてもわかりにくいことだったと思われま（苦笑）。自分たちでも確信があったわけではありません。

しかし、幸いにして今に至り、こうして多彩な信頼できる仲間が周りにいてくださる状況にあって、これまでの歩みは間違いではなかったように感じはじめています。周りにいるみなさまに、安心してもらうためには、もうすこし時間がかかるかもしれませんが、草の根自治の運動を引き継ぐ市民組織として、わかりにくいけど、たぶん大きく間違えることなく、むしろ、着実に市民の力を組織してきているのではないかと、思いたいです！（苦笑）。おごることなく、精進してまいります。みなさまのお力添えに心から感謝するとともに、これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます。（2017年5月）

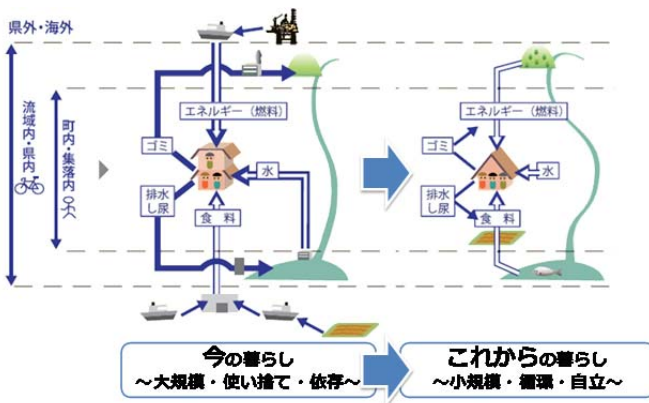
子どもと湖が笑ってる未来へ

●はじまりはびわ湖のせっけん運動。力を合わせて身近なものを活かす。



1977年に起きたびわ湖の赤潮をきっかけに広がった「せっけん運動」。その中から、当時の湖南消費生活協同組合が始めたリサイクルせっけん事業(リサイクルせっけんの供給と原料の使用済み食用油の回収)が碧いびわ湖の原点です。以来、一貫して「力を合わせて身近なものを活かす」暮らしづくりと地域づくりに取り組んできました。

●子どもたちとびわ湖の未来を照らす、自立循環型の暮らしと地域へ



赤潮の後も、地球温暖化や原発事故など、エネルギーの大量使用と大規模システムに依存した暮らしが、水・土・大気を汚し、子どもの未来を脅かしています。碧いびわ湖は、個人の幸福と社会の持続可能性を共に高める、小規模・自立・循環型の暮らしと地域社会の実現に、一人一人の想いと力をつないで取り組んでいます。

買いもの・住まい・コミュニティ、自分たちの暮らしを自分たちでつくる。

特定非営利活動法人 碧いびわ湖

521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3

電話 0748-46-4551

FAX 0748-46-4550

メール info@aoibiwako.org

HP <http://aoibiwako.shiga-saku.net/>

子どもと湖が笑ってる未来へ

碧いびわ湖